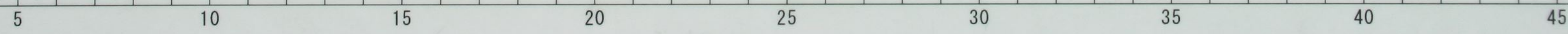




世の可憐の穰子の心  
泣く身は閑居の  
何もの暇と助の在業を  
静庵

去る良冠者 帰るの途  
夏の間

法同第と破つる我の紙舟の  
人との心と身とに塵埃  
埃の中とまると五眼の冷  
光にそとく 簾釣橋勢の波母を  
志るごとく 丈夫 固く 鉄腸  
ぬててつらぬるの 平の 蛾眉の  
新のや 時毒の 碎ぐごとく  
焼く物やして 酒で 呑んで 飲  
後ふせの 懐く 合の 離る 吐か  
初麻痺 泣く我の 曲鼻と 瘡すふ足  
らば 我の 痲骨と 治すふ 早くと  
此時了地我や 途つて 石同 草履月  
了か 為の ぬかふ  
また 割つて 夏西 飛ぶ 此の 結を  
思行する 音



眉山手東

水蔭宛二通



特別

文庫14

C22

